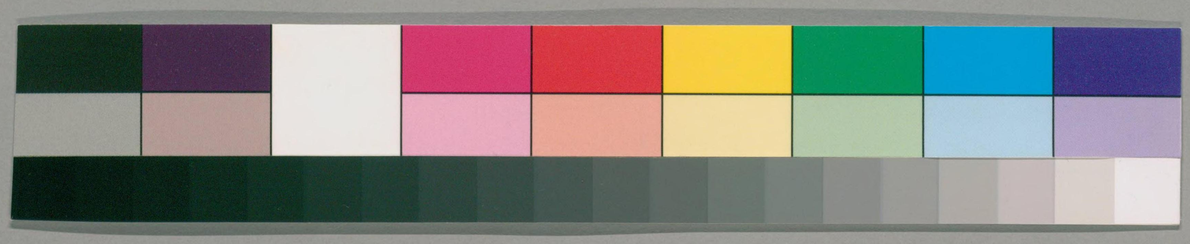


852
19
852
20

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『景山公御詠草』　請求記号 862-19

862
19

景山公御詠草

宣明加朱点

春之部

国立国会図書館　タイトル『景山公御詠草』　請求記号 862-19

ガラス使用

景山詠草中清書畧記

一上巻春夏合冊　春十九枚　夏九枚

一中巻秋冬戀合冊　秋十枚　冬五枚　戀五枚

一下巻雑一冊　紙數廿七枚　總計七十五枚

右三冊以廿七枚鳳鳴閣罫紙記之也

慶應二年寅七月廿日呈

覧據　常山　鳳山及雀山三公例伏

奉請

御序跋也　臣宣明謹茶擬表奉序

862-19

景山公御詠草巻之一　此九集ハ和歌ノサマヲ撰ビ定メラレタルモノニテ景山歌集トカ又ハ滿龍詠草トヤウニアルベキ

春之部　臣下ノ撰ヒ奉ルニアラズ景山公ノ御草ヲ臣下ノ撰ビ定メラレタルモノニテ表ニ書ケルごとくなり　哥道局書入

立春のこころをよめる

千早振神乃齢志玉鉾の道一あまねく春立ぬ

久方乃雲井の年一神代より春志至ぬる事志知ぬ

春立ぬる朝の空志見渡せば霞乃衣一幾重かさねん

新玉乃年立初る日乃本乃四方乃国志春志立ぬ

四方乃国志春志立ぬ

国立国会図書館　タイトル『景山公御詠草』　請求記号 862-19

ガラス使用

景山詠草中清書畧記

一上巻春夏合冊 春十九枚 夏九枚

一中巻秋冬戀合冊 秋十枚 冬五枚 戀五枚

一下巻雑一冊 紙数廿七枚 總計七十五枚

右三冊以廿七枚鳳鳴閣罫紙記之也

慶應二年寅七月廿日呈

覧據 常山鳳山及雀山三公例伏

奉請

御序跋也 臣宣明茶擬表奉序

862-19

景山公御詠草巻之一 此内集ハ祇園ノ書ノサマヲ模トキ巻数多モ 景山歌集トカ又ハ潜龍詠草トヤウニアルモ 臣下ノ撰ナラバ景山公御草トアルモ妨ナシ 臣下ノ撰トスルハ祇園ノ名ニトヾク書アラムヤ

春之部

立春のこゝろをよめる 哥道局書入

千早振神乃斎垣の玉鉾の道ある春に逢ぞうれしき

久方乃雲井の年 神代より春をも宝とぞ

春立ちぬ昨日乃今日と思ふ事乃なきだにも

新玉乃年立ち帰る日乃光をも神代乃春

四方乃海長閑き春乃日乃光こそ

出る日乃光乃春乃

年内立春

巻首ニアリ

国立国会図書館　タイトル『景山公御詠草』　請求記号 862-19

ガラス使用

元日

白雪の
春の色こそ
事多き
年の始に
降りそへ
ぬらめ

雪を
詠める

一年に二度咲く
花の色をみよ
雪の内の
梅

新宝よ
立春
待ちえて
事始
めに
春は
新宝
梅より
先に
咲き
初めよ

立春雪

白雪は
降りそへ
ぬらん
春立つと
言ふ
ばかりに
咲ける
梅の花
かも

立春霞

春立つと
言ふ
ばかりに
霞みぬる
山の
端の
雪
消え
行く
見ゆる
かな

子日

年ごとに
引き
植ゑて
見る
小松
幾千代
経ぬる
ものと
知らまし

国立国会図書館　タイトル『景山公御詠草』　請求記号 862-19

ガラス使用

東風解氷

草の芽ふきそめて春風霞をわたるころ

早春鶯

新玉の年立かへり鶯の谷の戸出ぬ今朝の一声

若菜

つむ事も雲ゐ遠くなりにけり沼ぶる雪の下草

初春鶯

谷の戸を梅の香ふきて鶯の宿ゆく春も近くなりけり

立春梅

きてみよと誰ゆへ梅の匂ふらん春待ちえたる人の袖にも

国立国会図書館　タイトル『景山公御詠草』　請求記号 862-19

ガラス使用

初春鶴

霞

霞添春色

国立国会図書館　タイトル『景山公御詠草』　請求記号 862-19

ガラス使用

梅ノ処ニ同ジ
谷梅

ホトヽギス詞
谷ノ古事ヨリ出ル共
皆ムカシヲ忘ルヽ

○鶯

中ゟ那ゟ事ニ迄一ツ時ノ
学ヒ的様ニ山谷乃学ヒ
年経ヒ共ヒ山谷乃学ヒ
帰ヒ

○鶯出谷

谷ヲ出ヲ鶯ヲ
ヒ共ヒ学ヒ
ヒ

○霞中鶯

霞ノ中ヲ鶯ヲ
ほの〳〵ト聞ヒ

依林嘗

緑ふかき林の雪も春たちて
いろかへぬ松のみどりぞ
ことしをも祈るべらなる

窓嘗

窓近く来ゐる春の
初風も梅にぞ雪の
降雪ぬ窓の小屋乃
梅花

雪中嘗

春性有嘗

治まる時代をうれしめでたき
(ニハメバヂノ訛ナルベシ)
この御乃栄の春のきたるや
ら年をうたふ鳴鶯乃
春をしらせて
(二)春くるのきざしをしらせ
(三)天保四年巳三月南郊巡村之
(四)節数村ふいに墨亜来ると
(五)家々やうやうにて号乃明ゆく
庭の梅乃花ちれば
(六)学ぶ拝まつる野ら

我こ山河乃恵ハ神垣の里とふ
花の年出之ハ庭の千とせ安ふう
乃雛ふ人乃まなく見えて清き
乃まかりかすゝ

名にしおふ神垣の里乃いとかきの緑をそへて祝やまさん

わか恵み神垣の里乃いく年もあひ見えぬへき
わか身の為ハ何事もなくて世の中ハ
世人のいのるはやかき細月甚れ
まこと頼まて

世の中ハ思ふ斯くて我か身ハ乃恵みもまさん

残雪

春かけて日陰に残る白雪はさこそ数ある山路かな
日にかゝりもめくる庭の遠山里ハいかまて春の雪を見るらむ
春もまた嵐さむけき松の嵐ハ消残る雪や花の面の汁

春雪

花の色の枝にかゝりて見る間もなく降りて消る野の沫雪

春草短

草漸青

天保四年癸巳三月廻村して西迭村

梅

梅風

国立国会図書館　タイトル『景山公御詠草』　請求記号 862-19

ガラス使用

梅薫風

玉ゑて無き花乃香ゑ成ぬとも風の梅ゑ香ゑ寸る

梅花風靜

淺梅乃枝ゐ風のそよ吹ゐ香ゑ

雪中梅

春風の匂ひ吹ゐ香ゑ雪ゑ

初春梅

春ゑて猶寒き朝ゑ咲梅乃花

谷梅 鶯部

国立国会図書館　タイトル『景山公御詠草』　請求記号 862-19

ガラス使用

若木梅

壬三月見梅花

(四)嘉永四年 正ノ

梅有遅速

梅度年香

梅交雪芳

国立国会図書館　タイトル『景山公御詠草』　請求記号 862-19

ガラス使用

潛龍閣

梅残数点雪

降積る雪とみるまで白妙は軒端の梅の花咲にけり

春風もなほ寒けれは消残る雪にまかふ梅乃花哉

庭梅　共三首

消残る雪かあらぬかと見しまては白妙に庭に咲る梅か香

行路梅

主しらぬ垣根の梅か香はいつしかも人の袖にうつりける

花乃色は霞にこめて見えねとも香をありやとここに匂ふ梅か香

梅花盛

咲初る梅乃梢の白妙は春来にけりとつけて鳴鶯

白妙乃花盛なる明日をまたここに見る花の梅か香

同盛久

梅か枝にうつりかほる梅乃花さかり久しき香にも匂ふらん

咲花の香やいつまてと宿にさかり久しき梅か香

隣家梅

我宿に植ぬ色香を咲梅は風の便に志る庵よやまと辞

かへらぬ里に香をとめてとふころは隣の梅やにほふ哉

庭梅

咲しより梅のかをりあたりなる人も
なつかしく心ひきとめて夜の更るも
しらぬ

夜梅

夢ならぬ夢のかよひ路ほのぼのと
梅の香ばかりしるべして

同前梅

咲梅乃匂ふ軒端の月影に
月の光もそひて梅乃香

春月

梅乃匂ふ軒端の月影に
夢ならぬ夢乃かよひ路咲梅乃
香ばかりしるべして

朱雀門

咲梅乃匂ふ軒端の月影に
夢ならぬ夢乃かよひ路咲梅乃
香ばかりしるべして

水雲梅

咲梅乃匂ふ軒端の月影に
夢ならぬ夢乃かよひ路咲梅乃
香ばかりしるべして

庭梅

咲しより梅のかをりあたりなる人も
なつかしく心ひきとめて夜の更るも
しらぬ

夜梅

夢ならぬ夢のかよひ路ほのぼのと
梅の香ばかりしるべして

同前梅

咲梅乃匂ふ軒端の月影に
月の光もそひて梅乃香

春月

梅乃匂ふ軒端の月影に
夢ならぬ夢乃かよひ路咲梅乃
香ばかりしるべして

朱雀門

咲梅乃匂ふ軒端の月影に
夢ならぬ夢乃かよひ路咲梅乃
香ばかりしるべして

水雲梅

咲梅乃匂ふ軒端の月影に
夢ならぬ夢乃かよひ路咲梅乃
香ばかりしるべして

庭梅

咲しより梅のかをりあたりなる人も
なつかしく心ひきとめて夜の更るも
しらぬ

夜梅

夢ならぬ夢のかよひ路ほのぼのと
梅の香ばかりしるべして

同前梅

咲梅乃匂ふ軒端の月影に
月の光もそひて梅乃香

春月

梅乃匂ふ軒端の月影に
夢ならぬ夢乃かよひ路咲梅乃
香ばかりしるべして

朱雀門

咲梅乃匂ふ軒端の月影に
夢ならぬ夢乃かよひ路咲梅乃
香ばかりしるべして

水雲梅

咲梅乃匂ふ軒端の月影に
夢ならぬ夢乃かよひ路咲梅乃
香ばかりしるべして

庭梅

咲しより梅のかをりあたりなる人も
なつかしく心ひきとめて夜の更るも
しらぬ

夜梅

夢ならぬ夢のかよひ路ほのぼのと
梅の香ばかりしるべして

同前梅

咲梅乃匂ふ軒端の月影に
月の光もそひて梅乃香

春月

梅乃匂ふ軒端の月影に
夢ならぬ夢乃かよひ路咲梅乃
香ばかりしるべして

朱雀門

咲梅乃匂ふ軒端の月影に
夢ならぬ夢乃かよひ路咲梅乃
香ばかりしるべして

水雲梅

咲梅乃匂ふ軒端の月影に
夢ならぬ夢乃かよひ路咲梅乃
香ばかりしるべして

国立国会図書館　タイトル『景山公御詠草』　請求記号 862-19

ガラス使用

[illegible]

[illegible]

[illegible]

文政八年酉二月 小集園の梅の花

國香や初音を待つ梅の花

初音とは鶯の鳴き始めをいふ

文政十一年戊子二月 弘道館にて

文武を兼し生徒師範皆賞美す

天保十年己丑正月 児玉匡忠園亭にて

古梅の枝を折て

梅花乞ふ春の使

天保ん文政ハ誤

文政十一年庚子二月 弘道館にて

文武を兼し生徒師範皆賞美す

天保十年己丑正月 児玉匡忠園亭にて

古梅の枝を折て

梅花乞ふ春の使

前田文学の許を我事と梅の香も

ゆかしき哉

梅乃香も乞ふや春の使

牧で経毎朝ごとに梅乃

ゆかしき哉

梅乃香も乞ふや春の使

国立国会図書館　タイトル『景山公御詠草』　請求記号 862-19

ガラス使用

天保四年癸巳三月廿三日
武蔵保内
巡村をして伝連村へ至り生村乃
里正祐助乃家へ至休
事ありて梅乃賀筆をとりて
平戸村の名や数つくして家ふところへ
彦の梅乃枝へ結付る
彦山路を梅をたづねき
僧寒国乃梅乃名ありて風雅
なる筆ならむとおもふ
咲梅乃花に散をまつ
とよみし紀貫之をおもひ

弘道館よりとて奉れる
廣島の御社より二株の梅
あり御陽うありて右
の方れうは酒梅とて酒の
まぢをつくる白うへの
花ざかり

五一事我手折梅賀
弘道館神乃御前乃
実ありのごとく言葉をつくしてある
春賀
重之卿乃神垣乃梅をたづねて
開ぬ前にと折て右乃方へ
酒乃出来たる時の為に植
又左の方へ
白妙乃雪咲ぬ
牛梅と紅ふかき
我いとけなき時より
当年我ともに
墨ぞめ乃
若木乃梅乃
春ごとに
花咲ん事を
待ん

国立国会図書館　タイトル『景山公御詠草』 請求記号 862-19
ガラス使用

ぴハオツノ音ナレハナリ（假字ニ用ヒガタシ）

大野木をとよみて出まいとよく
咲きたり

白妙の赤西をの野の海をんの船のしんくるふ
ねの帆

○天保二年辛卯三月詩歌梅

鉢植の梅をとよみて

野梅四季歌

○梅里ふるき乙女の袖をうき梅は珠梅
珠梅ふるき乙女の袖をうき梅は珠梅

乙女子ふるき梅は衣をうき梅は衣をうき梅は衣をうき梅

○梅

春風乃色香深ふかとそ
ちるやちる賤乃をも雪梅
去雪をも梅乃
水雪梅

流水風ふくとそ
折風ふく梅乃
閑ふるかな雪を梅乃
雪梅

雪をも静をも風とちらまし梅乃雪

国立国会図書館　タイトル『景山公御詠草』　請求記号 862-19

ガラス使用

春曙

曰乃出初霞一片峰頭紫
曾好拂雲雪一關の春谷水
暖のおの〻春水心乃鴛子月乃舟入叫子を知ら

春雨

五百の駒子の雨好芸子仕
二首

昨日雨

春雨乃ふる音丸恵を故等芽衣子漂ら

庭春雨

春雨や降るとは知らで来て泊る

野春雨

春雨や人こそ知らね袖の露

帰りをや待つらん春雨の袖の露

春雨や濡れてやこゆる山の井

春

羽鳥

等志を知りてお乃れ乃ごとく鳴く

国立国会図書館　タイトル『景山公御詠草』　請求記号 862-19

ガラス使用

董菜

葉乃花

早蕨

蒲公英

桜

霞中花

躑躅

国立国会図書館　タイトル『景山公御詠草』　請求記号 862-19

ガラス使用

松間花

行路花

花國

名所花

山花

深山花

本庭まで深き山路の春ならん人こゝろなき深山にも匂ふ梅の花

折花

梅の花折てかざせる袖の香に春の雪ふる心地こそすれ

夕花

名にし負ふ夕の梅の花ならば匂ひやそふる春の月影

嘉永三年戌三月真田信濃守妻貴賀の

庭の梅乃盛を折て遣すとて

名にし神垣の梅の花ならば匂ひやそふる春の月影

梅雪

梅の花雪にまがへて折つれば袖にも春の余波こそ立

梅月

梅雪

梅月

国立国会図書館　タイトル『景山公御詠草』　請求記号 862-19

ガラス使用

深山花

折花

夕花

嘉永三年戌三月 真田信濃守

国立国会図書館　タイトル『景山公御詠草』　請求記号 862-19

ガラス使用

（七）嘉永癸丑の春

向の家の園の梅

花盛りなるを

花盛りなるを

（八）嘉永癸丑の春

向の家の園の梅

花盛りなるを

国立国会図書館　タイトル『景山公御詠草』　請求記号 862-19

ガラス使用

枯樹花

春雨にあへハ咲にし花の梢も精の葉をも見る年

古木にも花咲ぬる人乃かほよ

云一よりも世付る

咲花ハ春毎に筆をまたぬかめ雨にもあはて咲

風早三位公元卿許より閑とこそ

くれハ櫻乃花の詠に寄せて

筆をとりて初めて生涯に蔭乃詠め給ひ

母君乃御乃庭へ遊ひし時

松山は波もと雨かと松原の濱乃櫻乃花の盛りなりし

一　文政十二年二月廿日隅田川梅乃邸にて

隅田川乃花を見てよめる

長閑なる春のけしきに霞立ち隅田川原乃花のさかりに

木母寺にやすらひて梅若塚にて

隅田川岸乃櫻の花よりもあはれを誘ふ梅の青柳

同所にて

家にこそ花も盛りと思ひしか又来る春も

とにかくに花を惜しみて

弱郭とよめて

よの中は梅の花より隅田川手折りてかへる一枝

(四)天保十一年子三月廿二日千束村ゟ
泊ゟ舟ニ乗
(二)天保四年巳三月廿日同所ニ
(三)天保五年午三月秋葉村ノ里正森ノ
家ゟ古戸ニ
名を似ぬ秋葉乃村ぶ春つゝまいぬ

花園ゟ
宮ゟ
同村
茶ゟ
ゟ
書院度ゟ

落花

さそひゆく風に散ゆく雲の中にしよしや嵐の名のみ

中々に風のちらすもさく花の雲の中しもやまの名をのみ

吹風といふもかひなくちる花の雲のうちにやまのかすみ

さそふ風の吹もやさしくあはれなる

梓弓やよひの春もちりはてゝ人のめにみる

咲きて散るもかひなきやまの花と人や知る

行路落花

道もせにちる花ふみゆく旅人の袖にも花の香ぞのこりける

文政六年未三月奉
命若年寄至於水
府接里羽根町倉
庚申古梅建碑之
地看畢過留田不
取咩五十人條款山
其蛙ノ聲飛冗請
可愛也

天保四年巳三月桃原橋乃桃の

花さかり成頃見てよめる

今年はまた桃の花さく橋の名に

咲桃乃花はむかしにかはらぬをみて花の

又此年桃原橋にて

去年見し花よりも今年はかはらぬを

朝霞晴のけしきに

かゝる田のいろの雨に鳴かはづの声

蛙

夕ぐれは沢辺に鳴くかはづの声もいとゞさびしかりけり

天保己亥 五年 二月廿五日 船手村屋舟
友もの家にて酒を酌乃里と名付てよめる
此所にアラシメーホシ
ふなそこのなそこのなそこの此あとをとゝめよ
此所にアラシメーホシ
ふなそこのなそこのなそこの此あとをとゝめよ

此君の情乃深さを思ひ
新田郎家にて
雪莊乃名を
萩の花ちりしく庭の雪ならで
如古ふりつもるとも見て
萩の事ふ 其雪かゝる言葉文字を再ひ
萩の雪ふりしく庭の萩

苗代
春ごとに絶ず續ける
田畑乃世々
換地のごとく
いくたびも
山畑乃
苅ても苅ても
尽ぬ乃ごとく
改ゆく
君乃
治る御代乃
末ながき
山島村
郷里野
やまもゝ
治る雪乃
あしたや
咲ぬらん

卿岡
楠堤去後

潜龍閣

天保四年巳三月舎弟村松福堅寺にて

とくちりし花やこふらん杜若咲にあやめの色をうつせる

杜若

春の色を夏と隔てかきつはたいつまてさける花咲ぬらん

牡丹

名にし高き富貴草のみかみ草は庭の匂ひ

河つとをつくりて再出

春山吹やなきの嵯峨の花に

山吹

見わたしの岩根の花のしら波もかくや咲にし花あらそひしか

春風のはなにふれてあまいりし岩根の名をとめて

天保四年巳三月大岩村家や次郎の家にて花を見てかきつけて扇に

かきつけて

岩間行清き流れに影みえて山吹の花

小金井にて

とかく川岸の花見えて山吹の花

862
19

10710

暮春風

花ちりて後の日数の指を折

春旅 牧童

下ゆく水に香を里ごとに

梅の木

飛ぶ鳥の水浴す

三月尽

幸ひと春の行くを惜しむ哉

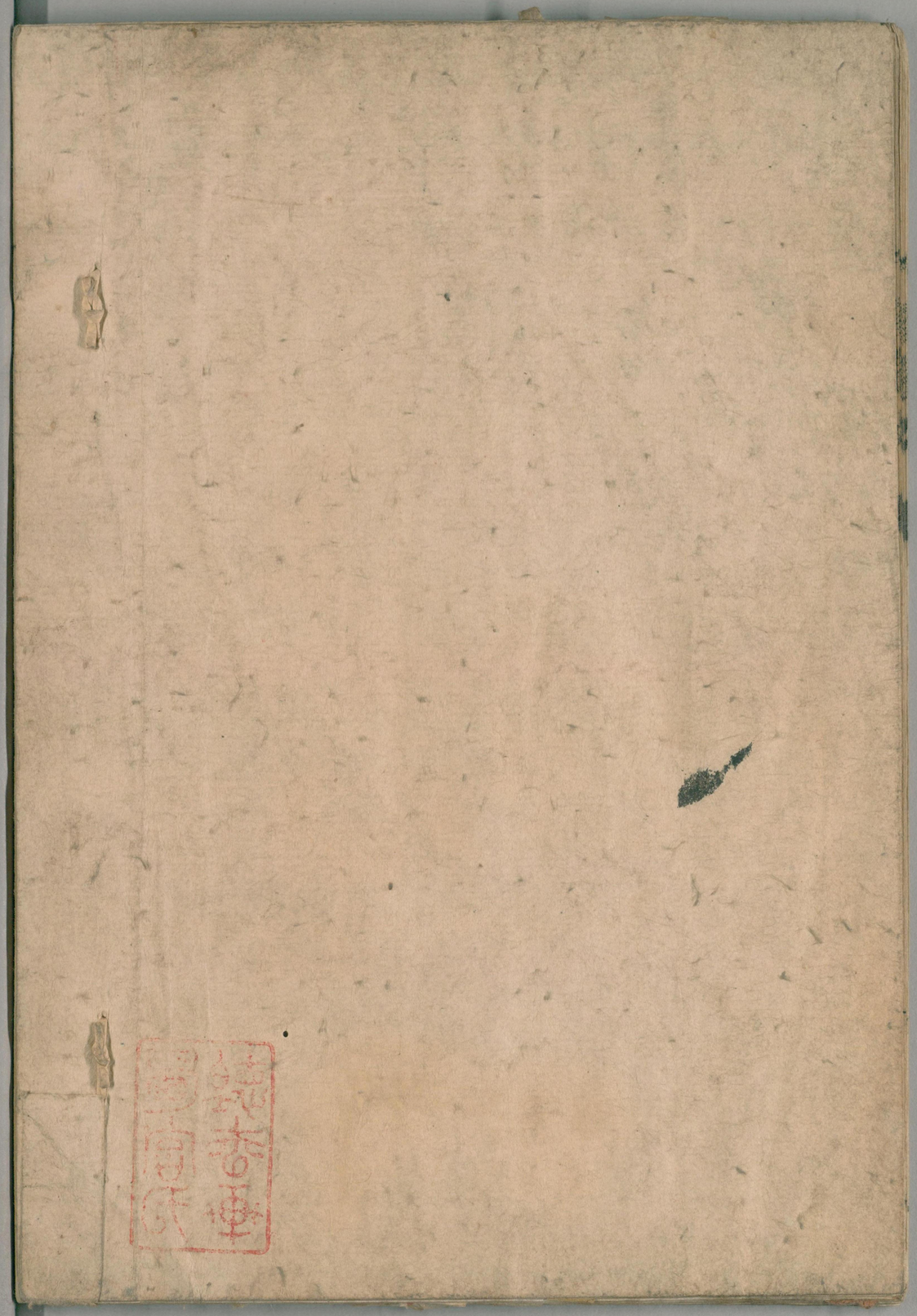
惜めども春の行くの早き哉

朱点百四拾六首

西野宣明撰

国立国会図書館　タイトル『景山公御詠草』　請求記号 862-19

ガラス使用



国立国会図書館　　タイトル『景山公御詠草』　請求記号 862-19

ガラス使用